

<小学校 学級経営>

やる気を育てる学級経営
—個人目標の認知・実践・定着化を通して—

糸満市立米須小学校教諭 諸見謝 弘

目 次

I	テーマ設定の理由	31
II	仮 説	31
III	研究の全体構想図	32
IV	研究内容	
1	「やる気」を育てる基本的な考え方	33
(1)	学習意欲	33
(2)	原因帰属と学習意欲	33
(3)	児童の学習意欲を育てる学級経営	33
(4)	自主性を育てる学級経営	33
2	個人目標の認知・実践・定着化を図る指導	34
(1)	目標のとらえ方	34
(2)	実戦に向けての計画の仕方	34
(3)	評価・目標修正の仕方	34
3	やる気を育てる学級経営（具体的な実践）	34
(1)	道徳での実践	34
(2)	学級活動での実践（個人目標への実践）	34
(3)	家庭学習での実践	35
(4)	教科学習での実践	35
4	学級活動検証授業指導案	35
5	結果と考察	37
V	成果と今後の課題	40
	<主な参考文献>	40

I テーマ設定の理由

今日、学校教育が抱えている大きな課題のひとつに、児童・生徒の学習意欲の低下があげられる。学級でも「国語や算数が嫌いだ。」「わからない。」などの声を聞く。どうすればわかる授業が展開できるか、指導者なりに「指導過程の工夫・改善」、「教材・教具等の配慮」等、あの手この手で「わかる授業の展開」をめざして研究に取り組んでいる。しかし、指導者側の研究は多く見られるものの、学ぶ側の児童の気持ち、意欲に焦点をあてた研究が少ないように思える。

学級で、授業中教師の話を上の空で聞いている児童、グループ学習で主体性のない児童など、一見「無気力」に見える児童達は、学習に対する関心が低いということではなく、「学びたい」という気持ちはあるが、基礎学力の低さに起因して「やる気」をなくしているのではないかと考えられる。琉球大学心理学科（島袋・井上・嘉数）の研究でも「沖縄県の小学生の基礎学力の低さは、学習に対する関心が低いということが原因ではなく、常に成績を気にしていても自信がないために持続的な挑戦をしないことによると考えられる。また、学業の成功・不成功の原因を努力に帰属していないこともわかった。」と述べられている。つまり、沖縄県の児童が学習において「努力するとは何なのか」「どのように努力すればよいのか」ということが、具体的にわからないということなのである。本学級の実態からもそのことはうかがえる。

学級では、学校の教育目標、学年目標を具現化し、児童のめざす学級づくりをするために学級目標が掲げられている。本学級においても「めあてを持って最後まで頑張る。」という学級目標がある。そのもとに毎学期初め個人目標を掲げて、日々の学習、学校生活に励むはずなのであるが、目標を掲げても継続努力することができず、学期終了時には自分の目標が何であったのかもわからない児童がでてくるのが実態である。これは、個人目標がうわべだけのものになっていて、行動に至らない結果であると考えられる。

ところで、島袋（琉球大学）は、目的達成に向けて努力する行動は、①目的が明確化されている、②目的達成のための方法（手段）がわかる、③目的と手段関係の正しい理解ができていて、の三者の関係で成立すると述べている。

そこで、本研究では上記の研究を参考に、学級目標「めあてを持って最後までがんばる」に関連した個人目標の明確化を図り、同時に、その目的と行動（手段）の関係を理解させる。その上で、その目標に近づく個人の行動の育成を図ることを通して、児童一人一人の「やる気、やる喜び」を育てることをめざし本テーマを設定した。

II 仮 説

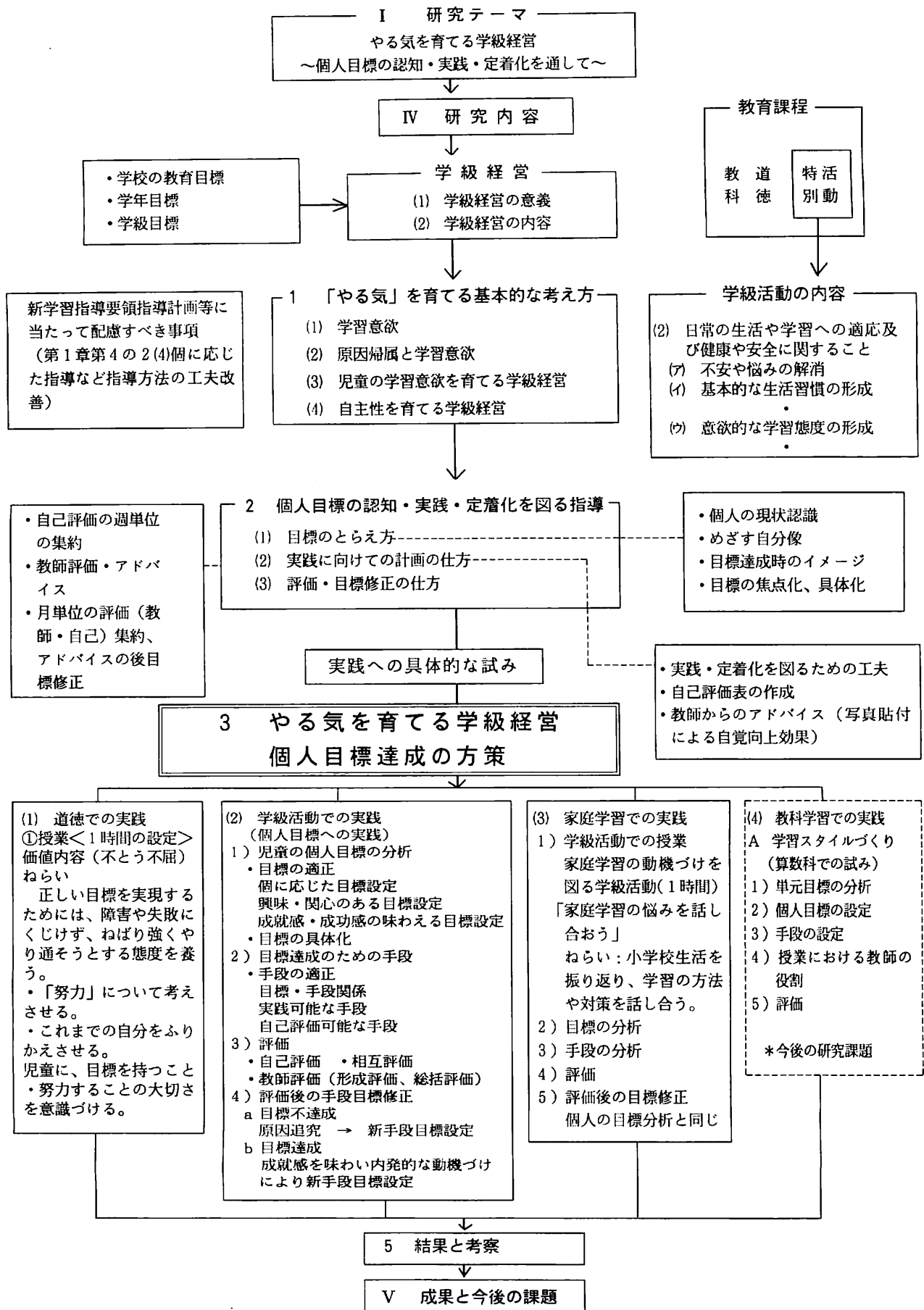
1. 学級目標のもとに、児童一人一人に個人目標を設定させる。
2. 目標達成に至る努力事項（手段）を具体化させ、定期的な教師の評価・自己評価、集約をしながら実践させる。
3. 評価、集約の中から、新たな手段・目標（修正、継続）を立てる。

以上の1から3までを繰り返すことにより個人目標の実践・定着化が図られ、児童一人一人の「やる気」が育ち、それが学級全体の「やる気」につながっていくであろう。

III 研究の全体構想図

研究を進めるにあたっては、研究内容や実践結果を整理し、全体を把握するために研究内容を構想図に表してみた。

研究の全体構想図



IV 研究内容

1 「やる気」を育てる基本的な考え方

(1) 学習意欲

やる気を育てるとは、まず、学習意欲を高めることである。宮本美沙子は著書『教育の心理学的基礎』の中で、「学習意欲と聞けば、ふつうは、学校の勉強に対する意欲のことだと考える。たしかにそれも学習意欲に違いない。一中略一教科書やノートを離れてなお学びたいこと、それが本当の学習意欲である。ここではこのような観点から、学校における教科に限らず、学習意欲を広くとらえておきたい。」と述べている。本研究においても「学習意欲」を同様に広くとらえていきたい。

(2) 原因帰属（ある事態を引き起こした原因の設定の仕方）と学習意欲

本研究を進めていく上で、原因帰属と学習意欲との関係を述べることは、必要不可欠である。上述の著者は、更にワイナーの研究を引用して、「一般に達成動機（やる気）の高い人は、成功を高い能力と努力に、失敗を努力不足に帰属させる。能力も努力も内的要因であるから、自己の内的要因により成功できたというプライドは賞の経験をもたらす、それがのちの達成行動の可能性を増す。また、失敗を努力不足に帰属させることは、努力しただけでは成功の可能性もあるという希望を持たせ、失敗の後にも努力を持続させることになる。一方達成動機の低い人は、努力要因の認知をほとんど持たない。成功に対して内的要因の帰属をさせず、失敗に対して能力不足に帰属させるため、恥を感じ罰を経験することになる。能力は固定要因であるため、失敗した課題に対しては、次の成功の期待をもてず、以後の達成行動も制約される。事象の成功、失敗の原因帰属の仕方によって、自己の意欲の制御（コントロール）を自己の掌中におくか、他者の掌中にゆだねてしまうか、という大きな差が出てくる。」と述べている。この理論を本研究の参考にしたい。

(3) 児童の学習意欲を育てる学級経営

児童の生活の中で大半を占める学級での生活が楽しいものか、そうでないかは、学級経営の成功、不成功によって決まる。それは、学習意欲・やる気の育成にも大きくかかわってくる。児童の学習意欲を育てる学級経営とはどういうものなのだろうか、『小学校教育基本事項指導事例集学級経営』の中で大和久は、「学級経営の中核的な位置を占めるものに学習指導がある。毎時の授業は指導が前面に出るのではなく、児童の学習が前提となり、また目標でなければならない。児童の学習意欲を高めるためには児童に「なぜ」という疑問を持たせることも必要になってくるし、また学習するめあてをつかませることも必須な条件となってくる。さらに、学習の持続をはかるために、それぞれの学年における児童の興味・関心を、児童との対話・調査等によって常に明らかにしておく必要もある。要はひとりひとりの児童が自分なりの学習の仕方を身につけることにある。疑問－計画－試行－解決－歓喜－自信の回路は学年により児童によって到達する時間こそ一定しないが、個々の児童がそれに取り組む姿を教師は大事にしていかなければならない。このような指導観にたつとき、はじめて児童の学習意欲を高めることができるのである。」と述べている。大和久が後半部分で述べている疑問から自信の回路はまさしく本研究で実施する児童の活動とほぼ同じものである。解決の部分に自己評価が入り、評価しただけでは計画にフィードバックする。

(4) 自主性を育てる学級経営

本研究を進めていく上で、児童の自主性というものも欠かせない。上述した大和久は、同著書で「自主性を育てるためには、児童に機会を与え、なんでも実行させることが大切であり、児童は実践をとおしてよりよい方法へのいとぐちをみつけたり、その失敗に気づくものである。なんでも教師に伺いをたてなければ自信をもってふるまえない児童に育ててはならない。しかし、放任することでは自主性は育たない。先生がいつでも自分たちのやることを信頼して見守ってしてくれるという安心感を児童がもつことによって、児童は勇気をもってことにあたり、やがては自主性をも身につけていくのである。」と述べている。

2 個人目標の認知・実践・定着化を図る指導

(1) 目標のとらえ方

学級の子どもたちに目標を立てさせると思いつくままに目標を立ててしまう。そこで、現在の自己認識や自己の課題などというものを考えて目標を立てている児童はほとんど見あたらない。もちろん、インスピレーションも大事だが、具体性や焦点化に欠けた目標が多いため実践につながりにくく継続もしない。目標を立てるときには、まず自己の現状認識から始め、そこから出てくる自己の課題をとらえ、めざす自分像のもとに目標設定をする。さらに、目標を設定する際に目標達成時のイメージを浮かべせながら作業することにより達成動機を高める。そのような一連の指導により目標の具体化焦点化がなされる。

(2) 実践に向けての計画の仕方

目標は設定したが継続実践がなされない。原因を考えるとこれまでの目標達成による成功経験の不足があげられる。教師の緻密な指導計画の不足もあると考えられるが児童個人の成功期待のなさも影響しているものと考ええる。つまり、目標達成の成就感をあまり味わったことがないため成功期待が低く、自己統制感にも影響を与えている。そこで達成可能な目標を実践し、成就感を一度経験すると、成功期待が高まり同時に自己統制感も高まる。具体的には、目標を達成するために一週間サイクルの具体的な行動（手段）計画を立て、実践し自己評価（ちばりま評価 図1）する。次に、親や教師による励ましを1週間単位で確実に実施する。目標達成に至るまでの具体的な行動の実践、継続の難しさを親や教師の励ましによってカバーしたい。

(3) 評価・目標修正の仕方

形成的評価で、個人評価・教師評価両方向。個人評価のサイクルは一週間とし、その評価をもとに次週の手段の計画を立てる。目標が達成されていれば、より高いレベルの手段の計画（たとえば質量の増加）を立てるか、同レベルでの反復計画をする。個人評価で目標が達成されていなければ、原因追究、手段計画の練り直しを行う。児童によっては、学期の目標自体を変更しなければならない者も出てくる、たとえば目標設定の段階では非常に魅力を感じていたが実践していくうちに興味関心がなくなってしまうなど、このような児童の場合は目標のとらえ方があまいことが考えられるのでもう一度教師・児童ともに目標を立て直す。それは、一ヶ月の集約（学級活動1時間）の個人評価、相互評価の中で目標修正したい。総括的评价では、学期終了前に（学級会1時間・学期をふりかえる）個人評価、相互評価、教師評価で学期間の自分のがんばりをふりかえる。

3 やる気を育てる学級経営（具体的な実践）

(1) 道徳での実践

テーマ設定理由でも述べたが、児童が学級で目標を立てても継続実践できないのは、「努力」という価値の内面化がなされていないのも原因の一つであると考えた。そこで、道徳の時間をつかい「努力」を包括している価値目標である「不撓不屈」の「片腕の名コーチ」を教材にして授業実践をした。授業後半の自己を見つめる段階で感想を書かせ、その中にこれまでの自分の「努力」したことも書くように指示した。結果は、「これまで目標は立てたが努力してがんばったことがない。」「努力することがとても大切なことであると感じた。」「自分もこれからはがんばりたい。」「主人公のようにがんばることはできないと思うが、できるだけがんばりたい。」などであった。道徳の授業を通して「努力」という価値の内面化、道徳的実践力を育ててきた。さらに、研究で目標の具体的な行動を実践することを通して「努力」という価値を実践につなげ、更なる実践力の深化をめざしたい。

(2) 学級活動での実践（個人目標への実践）

① 児童の個人目標の分析

個人目標の達成をめざすためには、まず目標の適正を検討しなければならない。個に応じた目標であるか、興味・関心のある目標であるか、成功感・成就感の味わえる目標であるかを児童とともに話し合い目標を決定する。当研究のねらいは、実践可能な目標を実践し、その成功感、成就感を味わい内発的動機づけによる学習意欲の向上、自己統制感の向上をねらいとするため個人目標は、

抽象的な目標や広範囲な目標ではなくより具体的な目標でなければならない。

② 目標達成のための手段の分析

目標が立てば次は目標達成のための手段（具体的な行動）を考える。それが目標を達成するためのよりよい手段であるか、実践可能な手段であるか、自己評価可能な手段であるか教師のアドバイスを受けながら児童自ら判断する。この手段をどの程度がんばるか（質・量）の目標を一週間サイクルで計画し（月曜日の朝の自習時間利用）ちばりま評価にファイルする。

③ 評価について

手段目標は、自己評価、相互評価、教師評価される。日々の実践後にちばりま評価に記入（自己評価）評価尺度も個人によって違うので教師のアドバイスを受けながら自分でつくる。週末に教師・親の評価を受ける。さらに月末に児童相互の評価、教師評価（がんばっている児童の賞賛）で集約する。総括評価として学期末に個人目標の達成状況の個人評価と教師評価をする。

④ 評価後の手段修正

週サイクルでの教師評価の後、手段不達成の児童は、原因を追究し新手段を設定する。手段達成の児童は、反復的な手段か、ステップアップした手段を立てる。

(3) 家庭学習での実践

個人目標への実践の前に「家庭学習をしっかりとやる」という練習目標を全員に与え、（事前に目標の分析をする。「家庭学習の悩みについて話し合おう」）手段設定、実践、評価を行う。評価は、当山小学校の志堅原先生のちばり用紙を利用した。

(4) 教科学習での実践

児童の学校生活の中核をなす教科学習についても本研究を応用した学習スタイルづくりをする。1) 単元目標の分析 2) 個人目標の設定 3) 手段の設定 4) 授業における教師の役割 5) 評価などの研究を予定していたが、今後の研究課題として学校現場に持ち帰り継続研究していく。

4 学級活動検証授業指導案 6年

① 本時の展開

		指導の内容	教師の発問と児童の活動	留意点	資料
み つ け る ・ 呼 び か け 10 分	教師	① 2学期の反省から3学期に目標にすべきことを考える	○2学期の反省から3学期に自分がやらなければならないことは何か考えてみよう。 ・自分が3学期にやりたいことを箇条書きにする。 ・目標をしぼる。	○各人の反省に目を通して聞いてアドバイスできるようにしておく。	2学期の反省
		② イメージによる目標設定と手段設定	・目標設定と手段設定の記入例を見て目標カードの書き方を知る。 ○目を閉じて、3学期の目標が達成できたときの様子を思い浮かべよう。	・イメージによる内発的動機づけをする。(1、2分)	BGM テープ

		指導の内容	教師の発問と児童の活動	留意点	資料
ふかめる	児童の自主的活動		○イメージができれば、次は目標を達成するために自分はどうなことをがんばっているか様子を思い浮かべて箇条書きしてみよう。 ・イメージがわからない児童は例を見て考える。 ・イメージした目標、手段（方法）をまとめる。	・がんばっている様子から目標達成のための手段をみつけさせる。（10分） ・期間巡視をし、手段設定のできない児童へのアドバイスをする。 ・準備された目標カードに書きさせる。（5分）	目標カード
		③ 自己評価表を作る	○自己評価表を作ろう。 ・「家庭学習の悩みについて話し合おう」の学習で使ったチバリ用紙を参考に自己評価表を作る。	・ある程度の必要事項が記入された評価カードに工夫をこらした自己評価表を作らせる。 1. 評価のサイクル（どれくらいの期間で） 2. 評価の仕方 ・実践ができたかできなかったか。 ・実践した時間がどれくらいかかったか。 3. その他 ・親のサイン・励ましの欄 ・教師の励ましの欄	
まとめる	5分	④ できあがった目標・方法・評価表を発表する	○できあがった目標、方法、評価表を発表しよう。	○みんなで励まし合い、計画倒れにならないように各人の意欲を高める。	
		⑤ 目標を達成するための手順を確認する	・板書掲示用カードを全員で読む。	・板書掲示用カード 具体的な目標・方法を立てる。 実際に行動する。 自己評価する。	・板書掲示用カード

② 事後の指導

- ・定期的な自己評価を必ず実行し、目標をたえず意識することを指導する。
- ・定期的な外的評価（親・教師）により、意欲を高める。
- ・目標・実践・評価→目標・実践・評価のスパイラルにより定着化を図るよう指導する。

5 結果と考察

仮説に基づき授業実践し全員が3学期の個人目標を立てることができた。これまでのめあてとは違って目標達成のための手段を具体的に書いてあるため、児童各人が目標達成のために何をすべきかはっきり理解できている（個人目標カード）。さらに、実践継続するための個人評価表（ちばりま評価）での1週間の手段目標の設定によって日々の活動がより明確化され実践、評価されている児童が多い。しかし、中には手段目標が立てられているが実践できなかったり、自己評価できていない児童も見られる。学習意欲を高めるために外発的な動機づけとして親からの激励をちばりま評価の中に取り入れた。

個人目標カード

名前 渡邊 次郎 3学期の目標

宿題を、ちゃんと出す。

• 具体的に
家庭学習 フォリント、ノートまとめなど

• 方法

- 早い時間にやる。
- その日の授業で、わからなかつたところを、もう一度やる。
- 今より勉強したところをたれているところをやる。

ちばりま評価

3学期の目標自己評価表
(6)年(1)組(1)番氏名 渡邊 次郎

目標 宿題をきちんと出す

日付	内容	時間	グラフ	コメント
1/8			100%	ヤセ
1/13	マラソン大会の イロイロ	50分	100%	宿題をきちんと出す
1/21	フットボール大会 練習試合	40分	100%	宿題をきちんと出す
1/22	フットボール大会 決勝戦	40分	100%	宿題をきちんと出す
1/23	フットボール大会 決勝戦	40分	100%	宿題をきちんと出す
1/24			100%	
1/25	ガラスの仮面 おもしろい	15分	100%	宿題をきちんと出す

先生に出した宿題はほとんど出して、来週もこのペースでいこうと思う
毎週日曜日に親の人に見てもらい
サインをもらいましょう

先生より このペースでがんばろう

名前 玉城 留美 3学期の目標

責任を持って
がんばりたい。

• 具体的に

- そうじ
- 日直の代身

• 方法

- ✕ あたえられた役割をはたす。
- ✕ 自分のやるべきことを考える。

3学期の目標自己評価表
(6)年(1)組(13)番氏名 玉城 留美

目標 責任を持ってがんばる

日付	内容	がんばり度	70点感想
2/5	掃除の日	90%	掃除機をかけるのが大変だった。
2/6	そうじの日	90%	とじんの1人でそうじができた。
2/7	ゼルをがんばる	90%	
2/8	係をがんばる	100%	1学期の係組に慣れた。
2/9	そうじの日	90%	早くおきた。
2/10	お手伝い	98%	お母さんの手伝いした。
2/11	お手伝い	100%	毎日お母さんの手伝いした。

毎週の感想
掃除の日もそうじの日も係もちゃんとがんばってやった。

毎週日曜日に親の人に見てもらい
サインをもらいましょう

先生より 留美ちゃん、これからもがんばってね。

図1 個人目標カードとちばりま評価

前述した個人目標カードやちばりま評価の実践は児童に興味・関心・継続意欲を持たせる上で効果があった。実践一ヶ月後のアンケートの質問1-1・2-1に対する児童の回答を資料として載せる。

1－1. これまでのめあての立て方と3学期のめあての立て方の違いを書いてください。

(回答例)

- ・2学期まではただ書くだけだったけど、3学期からはめあてを具体的に書いたのでやる気が出てきた。
- ・前までは、勉強のことやむずかしい目標ばかり立てていたけれど、今度は自分でできる目標を立てることができた。
- ・ちばりま評価を書くようになって、実行するようになった。
- ・自分から進んでできるようになった。

2－1. あなたが目標を達成するためにがんばることができた・できなかった理由を書いてください。

(回答例)

- ・ちばりま評価でがんばることができた。
- ・自分で立てた目標だから、ちゃんとしなければと思った。
- ・目標を達成したいから・目標が達成できたから。
目標達成のためにがんばることができなかった児童の回答は
- ・とてもがんばらなくても達成できそうだから。
- ・ねむくてできなかった。
- ・やる気がなかった。

さらに、目標の実践、継続をとおして得られる自信「自分はやればできるんだという気持ちになれましたか」の質問に半数の児童が肯定的な回答をした。

3学期の目標達成の実践と原因帰属との相関を見るためにアンケートを実施しその結果をまとめた。

(表1)

個人目標についてのアンケートの質問項目

1. あなたのこれまでの学期のめあての立て方と3学期のめあての立て方は変わったと思いますか。
a とても変わった b まあまあ変わった c あまり変わらない d まったく変わらない
2. あなたは目標を達成するためにがんばることができましたか。
3. あなたは3学期の目標達成のためにがんばっているわけですが、「努力」することの大切さがわかりましたか。
4. あなたは3学期の目標達成のためにがんばっているわけですが、自分はやればできるんだという気持ちになれましたか。
5. 6年1組のみんなが3学期の目標を達成しようとがんばっているわけですがクラスの雰囲気ややる気」になっていると感じますか。

原因帰属についてのアンケートの質問項目

1. やる気になればむずかしいことでもわかります。
2. 授業中、先生の話をよく聞きます。
3. 漢字をよく知っている友だちがいたら、それは漢字を頑張って勉強したからです。
4. 私は悪い点を取らないと決めたら、絶対悪い点を取りません。
5. やる気になったら、私は学校ですごくがんばることができます。
6. 友達が学校でよい点を取るの、その子ががんばって勉強したからです。
7. 私は学校でよい点を取ろうと思えば、よい点を取ることができます。
8. その気になれば先生のいうことを注意して聞けます。
9. 友だちがよく勉強できるのは、先生の言うことをきちんと聞いているからです。
10. 私はテストなどでまちがいをしないと決めたら、まちがえません。

質問項目1、4、5、7、10は統制感、2、8は能力、3、6、9は努力の3つの質問グループにまとめる。アンケートの回答項目は、個人目標のアンケート1のように4枝選択にした。

アンケートの結果を統計処理した結果表1の表のようになった。(原因帰属についてのアンケートを10月(前)と2月上旬(後)に実施)

表1 3学期の目標実践と原因帰属の相関

変数名	めあての変化	目標をがんばる	努力の大切さ	やればできる	やる気の雰囲気
統制感(前)	-0.025	-0.148	0.428**B	0.186	-0.261*C
統制感(後)	0.242*A	0.174	0.453**B☆	0.429**F	0.254*C
能力(前)	0.359*	0.010	0.280*	0.502**	0.251*
能力(後)	0.148	0.038	0.153	0.363*	-0.266*
努力(前)	-0.254*D	-0.155	0.279*	0.093	0.083
努力(後)	-0.257*D	0.067	-0.042	0.012	-0.269*3

*低い相関(±, 20~±, 40)

**いじむしい相関(±, 40~±, 70)

☆相関表の見方<努力の大切さと統制感(後)の相関グラフで例を示す>

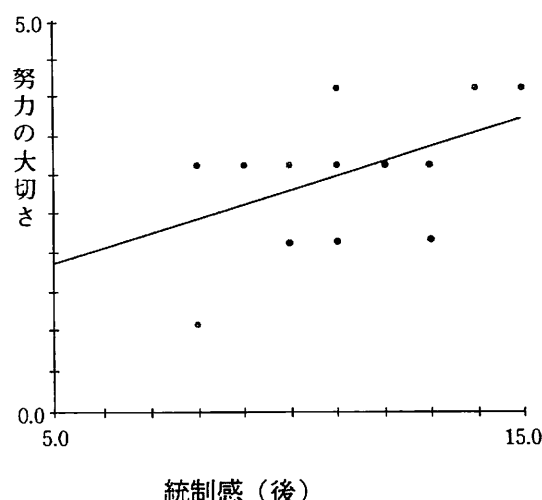


図2 努力の大切さと統制感(後)の相関

☆相関とは、二つの変量の結びつき、相互関係のことで、相関表の数値は、0から±1までの範囲で表される。+1が完全な相関関係で、-1が完全な逆の相関関係、0~±0.2までは相関なし。

<考察>

表1-A「めあてのたて方が変わった」と感じている児童は、授業後「やればできるんだ(統制感)」という気持ちが高まる方向にある。これは、仮説にある目標達成のための方法(手段)を具体的に児童に持たせたため統制感が高まったものととらえることができる。

テーマ設定理由の中で、「努力することが、どういうことなのかかわからない」という学級の児童の実態を述べたが、表1-Bの結果から「努力」することの大切さを知っている児童が、「やればできるんだ」という気持ち(統制感)が高まる傾向にあることがわかる。努力(目標達成のための行動、継続、自己評価の繰り返し)が、統制感を高めたものととらえることができる。

仮説「個人目標の実践、定着化が図られ、児童一人一人のやる気が育てば、それが学級全体のやる気につながるだろう」について、表1-Cから授業後統制感を感じている児童が、学級全体の「やる気の雰囲気」を感じていることがわかる。また、授業前に統制感のなかった児童も「やる気の雰囲気」を感じていることがわかる。これは、児童の統制感の高まりと共に学級のやる気の雰囲気も高まる傾向にあることがうかがえる。

表1-D「めあての変化」と「努力」との間に負の相関がある。これは、友人の成績の良さを「努力」に原因帰属しない児童が「めあての変化」を感じ、逆に「努力」に原因帰属する児童があまりめあての変化を感じていない結果である。これは、後者が目標を達成するためには、努力が必要であるということを理解しているため、めあての変化の必要性を感じず、逆に、これまで目標達成のために努力をしていなかった児童が、めあてのたて方の変化を感じたためである。クラス児童の一ヶ月間の実践を観察した結果、男子の中に目標達成のための努力をしていない者が数名いる。彼らの意識の変容を図ることも本研究の目的の一つであり、今後研究を深めたい。(その事については、V成果と今後の課題で詳述)

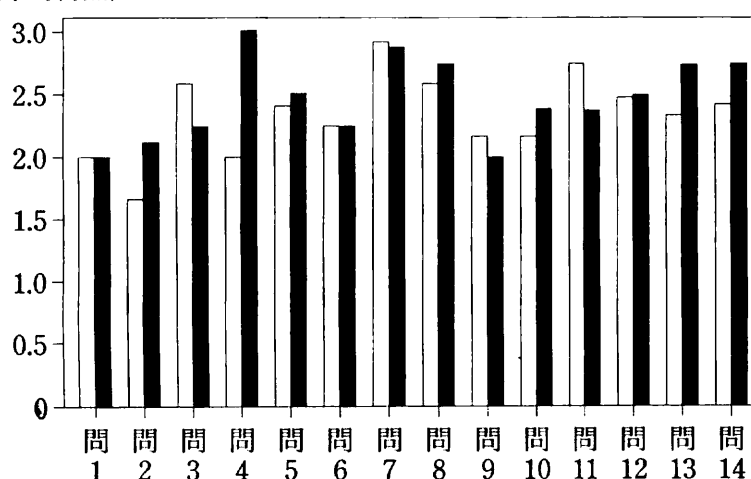
表1-E「努力」に原因を帰属しない児童が「やる気の雰囲気」を感じ、「努力」に原因を帰属する児童が「やる気の雰囲気」を感じていない。これは、前者が目標を達成するための行動をせず、学級のやる気の雰囲気に水を差していると後者が感じているためであると考えられる。検証授業後の自己評価(ちばりま評価)から実践状況を観察した結果、女子は、計画・実行・評価とこまめにやっているのに対し、男子に実行できなかったり評価を忘れていている者がいる。

V 成果と今後の課題

目的達成に向けて努力する行動（以後、目的思考的行動と表記）の定着（習慣化）は、自分で立てた目標だからがんばるとか、自分で評価するのでがんばれるなど、自主的な目標・手段設定ができている児童に多く見られる。さらに、継続による成就感、手段のステップアップによるチャレンジ精神など内発的に動機づけられている児童も定着している。外発的な動機づけとして先生や親にほめられることも習慣化につながる。ちばりま評価にある親や教師からの励ましの言葉がその役目をしている。

テーマ設定理由であげた個人目標の明確化、手段保有感を持つこと、目的と行動の関係を理解することを半数以上の児童ができた。目的達成に向けて努力することにより統制感の高まりを感じた児童も多い。（表1 F）しかし、仮説のもとに進めてきた研究の中で目的思考的行動の定着（習慣化）がなされなかった児童もいる。その児童に対する手だても考えなければならない。まず、その児童は手段－目的間の正しい理解がなされていないと考え「目標達成に向けてがんばることができた児童」と「目標達成に向けてがんばることができなかった児童」（以後「できた」「できなかった」で表記）の手段的活動の測定（図3）をした。

（平均得点）



□ 3学期の目標をがんばることができた児童の平均

■ 3学期の目標をがんばれなかった児童の平均

図3 手段的活動の測定

その結果から、「できた児童」が「できなかった児童」より高い得点を示した質問項目は、問3テストや当番をした後、それでよかったか確かめてみる（現実検証）、問11いますぐ成功しなくても、成功するだろうと思えば、根気よく取り組む（長期の達成のための自己統制）であった。「できなかった児童」が自分の欠点に気づきそこを改善しようとする努力も目標を達成するためには必要なことであると考えられる。

しかし、本研究の目的は、自分で立てた目標を達成するための手段を実践し、目標達成の成就感を味わうことにより、やる気、やる喜びを育てることにある。「できなかった児童」の欠点を指摘する

より、目標・手段設定の段階でのより望ましい取り組み方について今後、研究を深めたい。「できなかった児童」の目標が、本当に興味関心のあるものであったかどうか、児童と共にもっと深く考えるべきである。「できなかった児童」は、実践一ヶ月後の集約の中で目標修正を図った。その時点で「本当にやってみたいこと」を目標にするように指示した。このようなケースはよくあることだと思うが、そこでじっくり考え新しい目標を設定することも本研究のプロセスなのである。今回の研究においては、学級活動を中心に進めてきたが、今後は道徳、教科へと研究を広げ、さらに「やる気」に満ちあふれた学級づくりをしていきたい。

<主な参考文献>

- | | | | |
|----------|----------------------------|------|-------|
| 東洋著 | 『教育の心理学－学習・発達・動機の視点－』 | 有斐閣 | 1992年 |
| 島袋・井上・嘉数 | 『沖縄の児童の進路発達と学習の原因帰属に関する研究』 | 琉球大学 | 1995年 |
| R.ド・シャーム | 佐伯 胖 訳 『やる気を育てる教室』 | 金子書房 | 1980年 |